えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第101号
平成30年
(2018)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集　「大名屋敷の松飾り」……1～3
新年祝辞　江戸博藤森館長・友の会早川会長 ……3
えど友広小路……4～5
　会員からの投稿「無患子(ムクロジ)の実」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
『えど友』100号記念投稿「東京風景いまむかし」……6
　「久我山稲荷神社」の庚申塔／東急文化会館の思い出
見学会「定番・江戸城周辺探訪－その2(内濠周辺)－」‥7
大相撲 beyond 2020 場所　観戦の記 ……8
えどはく探訪　「江戸歌舞伎とともに歴史を刻んだ芝居小屋　中村座」……9
江戸名所図会を歩く…㉟［新日暮里から鬼子母神］……10
えど東京一景(8)－東京大神宮－ ……11
江戸博クリップ「江戸博の魅力」……11
催事案内 ……12

新春特集

大名屋敷の松飾り

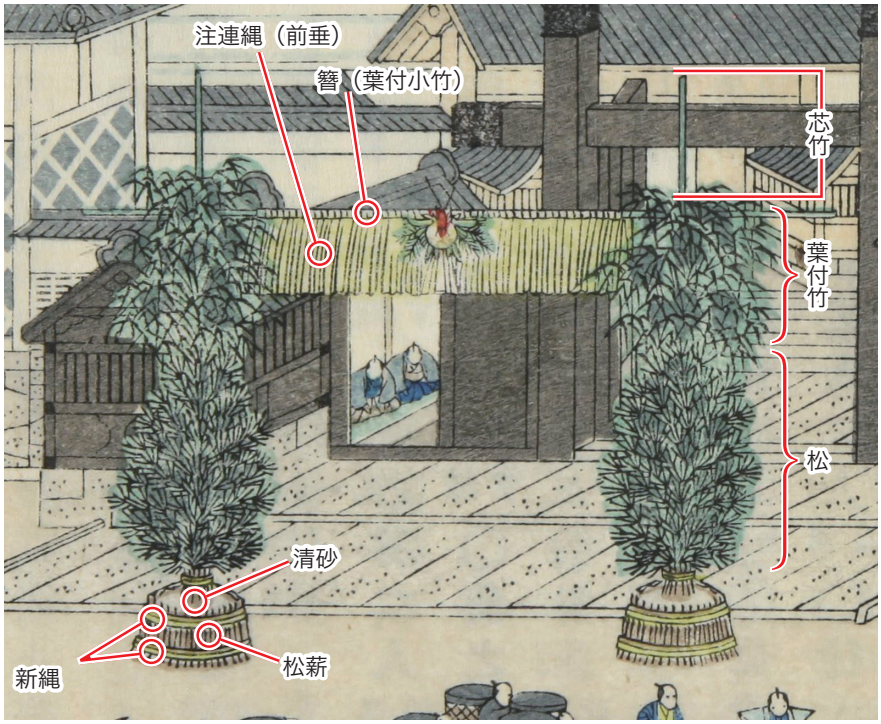
街に門松が立ち並んでいるさまは、いかにも日本のお正月です。松より竹のほうが目立つのに「門松」と呼ばれるのは、元々松飾りだったことの名残です。そんな門松が、今のような形になったのは明治以降のことです。それ以前はどのようなものであったか、今回は江戸の大名屋敷の門松を中心に歴史をひもといてみたいと思います。

大名屋敷の門松

大名に限らず新しい年を迎えるための門松は、「正月14日まで飾り、15日の朝取り除」いて火に焚(た)きます。これが「どんど焼き」です。承応(1652～55)ごろまでは、江戸でも15日まで飾ったといわれます(『東都歳事記』)。ところが寛文2年(1662)、幕府の命により松の内が短縮され、7日に撤収するようになりました(『守貞謾稿』)。江戸城の警護役である大名たちの気持ちを引き締めるためだったと思われます。

大名といえば、それぞれ領国の名誉を担っていましたから、門松も豪壮さを競っていました。しかし一方では、飾り方についての制約も定められていました。

大名屋敷の飾り方は「本飾り」とか「七つ飾り」と呼ばれていました。丈(約3m)余の松と3丈近い竹柱(たけばしら)を芯(しん)とし、竹柱には3本ないし5本、あるいは7本の葉付き竹を添え、新縄で3カ所を上から7、5、3の順で芯に結びつけます。これを左右に立て、裾は二つ割りした松薪(たきぎ)を芯の周りに並べ立て、新縄を巻いて止



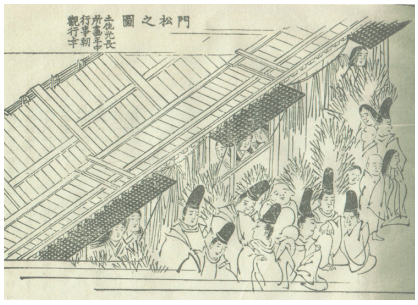
▲大名屋敷の標準的な門松の姿（広島藩浅野家の門松『徳川盛世録』―岡崎市所蔵）

めます。さらにその周りを清砂で固め、二つ割りした松薪を外側に並べ、上から新縄を巻いて固定します。その後、葉付きの小竹を左右の竹柱へ、鳥居形になるように渡します。この竹を俗に「簪」と呼びました。また、竹には必ず「注連縄」をかけました。これも俗称「前垂」と呼びました。注連縄の中央には、海老や香橙などを飾り付けるのが普通ですが、串柿や杠葉、炭などもありました。

他には、「巣籠」という飾り方がありました。これは竹を用いずに、数十本の小松を束ねて左右に立て、地上に太縄を輪状に置いて砂を盛りました。

門松のはじめ

新年に門松を立て注連縄を飾る風習の始まりについて、定説はないものの平安時代には行われていたようです。元は松ではなく「賢木(榊)」でしたが、平安中期ごろから「松」へ変わりました。『本朝無題詩』がおさめる惟宗孝言(1015～？)の「長齋之間以詩代書呈江才子(原文　七言律詩)」は、次のように述べています。



▲土佐光長「門松の図」

「百日潔斎月である正月(1月)一杯は、四墉(屋敷を取り囲む塀)を閉じ、お経(法華経)を唱えます。その際、昔は門を鎖し、賢木(榊)を挿していましたが、何時からか貞松(若い松)に換わりました」

また自注でも、「最近、世間では皆、門に松を飾る様になりましたが、自分の家は昔ながらの賢木を飾っています」と自慢しています。

しかし、まだ門松という言葉はありません。「門松」の名が出てくるのは、もう少し年代が下がります。堀河天皇(1086～1107)時代の歌集『堀河百首』が載せる藤原顕季の歌、「門松をいと浪たつるそのほどに 春明がたに 夜やなりぬらむ」が最初のようです。

これに続くのが、鴨長明の『四季物語』や吉田兼好の『徒然草』などです。なかでも『四季物語』には、初めて「松と竹」が登場します。ゆずり葉や羊歯なども取りそろえ、現在の正月飾りに近づいてきます。「ゆずり葉」は、新しい葉が出てから古い葉が落ちることから、親子相続がうまくいくことの象徴として使われました。ただ「竹」は定着しなかったらしく、『徒然草』では再び「松」だけに戻ります。

門松に「竹」が定着するのは、室町時代のようです。同時代後期に書かれた問答集『世諺問答』は、当たり前のように「竹」を載せています。従って、室町後期には定着していた様子がこれで知れます。しかし、武家が門松を飾った記録はいまだないとされます。

武家の門松

武家が門松を飾るようになったのは、天正年間(1573～92)前後といわれます。そのことを『風俗画報』(224号)が、次のように書いています。

「武家にて(門松を)立てしことは、鎌倉室町両将軍家には所見なし。天正の前後に至りて始めて見ゆ。『羽尾記』に云。其頃吾妻郡(上野)岩槻城に、上杉景勝より齋藤摂津守と云者を城代にさし置く云々。摂津守大手の門に門松たて、歳末の祝の折からなれば」

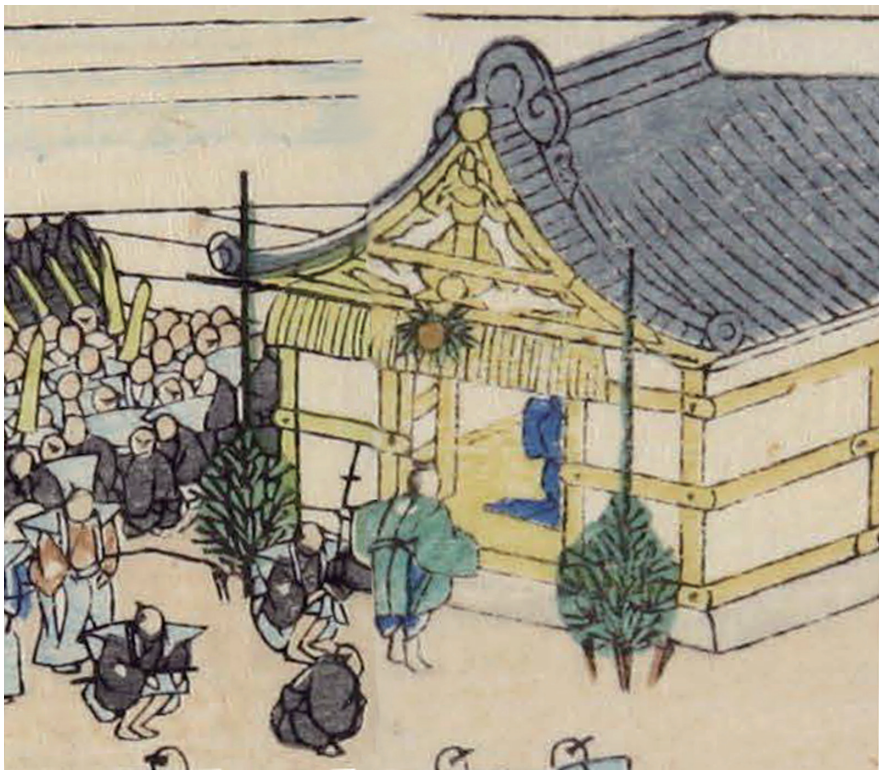
また江戸城の飾り竹は、全ての葉を取り除いていました。三方ヶ原の戦いで家康が武田信玄に敗れて以来の伝統です。同戦いで家康が負けた直後の新年に、信玄から文が届きました。それには門松を詠み込んだ次の歌が添えられていました。

松枯れて 竹たぐひなき あしたかな

松(松平＝家康)が滅び、竹(武田)は安泰(類なき)ということです。これに怒った家康は、

松枯れで 武田首なき あしたかな

即座にこう返歌したと伝わります。松は枯れずに武田の首が飛ぶ明日であるぞよ、という意味です。この逸話によって江戸城内を含め、徳川将軍家の門松は、全て葉のない竹を飾



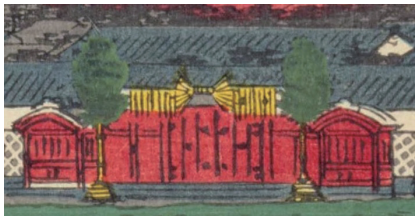
▲江戸城の門松（『徳川盛世録』―岡崎市所蔵）

るようになったとされます。竹の葉を首に例えたようです。諸大名家の門松と比べると違いは瞭然です。

大名屋敷の変わり門松

そんな徳川家の影響を受けたのかどうか、大名屋敷の門松も、自藩に伝わる吉兆伝説に基づいた飾りをするものもありました。中でも「佐賀侯の鼓の胴、久保田侯の人飾。(中略)綾部侯の札」(『風俗画報』)は、知らない人がいないほど著名でした。

▲現在も佐賀城本丸御殿の軒先を飾る「鼓の胴」



▲佐賀藩鍋島家の門松・鼓の胴（『名所江戸百景』山下町日比谷外さくら田一部分）

佐賀侯(鍋島藩主)の門松、鼓の胴は広重の『名所江戸百景』にも描かれているほどです。現在も復元された佐賀城本丸御殿玄関の軒先を飾っています。久保田侯(秋田藩主佐竹家)の人飾りは、松の代わりに人間(足軽)が毎日交代で立ったといいます。綾部侯(綾部藩主九鬼家)では注連飾りに「蘇民将来子孫之門」と書かれた木札を付けていました。皆競ってこの札を取ったため、「午後まであることはなかった」とあります。西宮神社の十日えびすのように、一番福をねらったのかも知れません。

平戸藩の松浦家では、松ではなく椎の木を飾りました。これを世間では「椎木松浦」と言いはやしていました。その由来は下記のようです。

松浦家第23代肥前守の時です。御厨荘へ巡検に行った際、同国高来郡を領有していた有馬氏の襲撃を受け、本城へ帰ることができなくなりました。仕方なく箕坪城に立てこもりましたが、食糧も尽きたため、城を出て(周防の大内氏領国となっていた)筑前へ奔り、大内氏へ援兵を求めました。そのまま年末を迎えましたが、身を寄せていた箱崎八幡境内は松を神木としていたため、切ることを禁じられていました。そこで代わりに椎の枝を門に挟んでようやく新年を迎えることができました。明応元年(1492)のことです。まもなく平戸から臣士が、筑前から大内の援軍も駆けつけたため、難なく敵を追い散らしました。この時の椎の木を、再興の吉兆として後々まで伝えたのです。

他にもまだあるかと思いますが、現在も昔のままを踏襲しているのは佐賀藩の「鼓の胴」だけです。近年に始めたため参考にしかなりませんが、萩藩の御用商人だった菊谷家では、ミニチュアながら『江戸名所図会』が載せる大名屋敷の門松を飾っています。

【取材】文・写真：広報部会・光田憲雄

【参考資料】『東都歳事記』『守貞謾稿』『本朝無題詩』『四季物語』『徒然草』『世諺問答』『風俗画報』『江戸名所図会』『名所江戸百景』

新年祝辞

江戸東京博物館　館長　**藤森照信**

明けましておめでとうございます。

本年からいよいよ江戸博も、正確には江戸博の建築も“激動期”を迎えます。

すでに休館しているのは、主に1階の改造のためで、再開するのは4月になります。その後、いよいよオリンピックに向けての展示の準備が始まり、オリンピックが終わると、全館の大修理の必要がでてきます。

こうした建築の変化だけでなく、江戸博全体の運営体制も変わり、これまでの民間企業との共同体的運営ではなく、東京都の財団だけによる体制に移ります。

建築と運営の変化を積極的に活かし、よりよい博物館としてゆきたいと考えています。

本年もよろしくお願いします。

新年ごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長　**早川良躬**

明けましておめでとうございます。

本年は博物館改修最中でのスタートとなりましたが、館のご尽力で友の会事務局と会議室は別棟に確保、古文書講座やセミナーは両国近辺で学習を続けます。見学会、地域文化探訪、会報『えど友』はさらに内容アップ。江戸ワールドの実景に肉薄し、体感できる工夫をこらします。ぜひ足を運び、会員同士の交流も深めて下さい。

今まで江戸博という大きな乗り物の中で学び楽しんできましたが、「会員自らが参画し創造する」が当会の基本。新たな課題に同心一体、果敢に取り組み、望ましい形を打ち出しましょう。

友の会会員の皆様におかれましては実り多い年となりますよう願っております。

会員からの投稿

『無患子（ムクロジ）の実』

野坂紘子

道灌倶楽部の集いで千駄ヶ谷駅に集合、将棋の駒モニュメントを見る。工事中で柵に囲まれているが、「千駄ヶ谷」命名の道灌の名が刻まれている。広大な田んぼで千頭の馬の背に乗せられる程のお米がとれた由、リッチな名なのね。さて、なかなか壮大な新国立競技場建設地の前を通って大江戸線落合南長崎駅で降り、西光山無量寺自性院へ。なんの変哲もない田舎の小さなお寺さんにみえる。が、実は道灌公が江古田ヶ原の戦の際(47歳)、1匹の黒猫が現れてこのお寺にいざなったそう。そこで一夜を明かし、元気回復、戦に勝ったそう、豊島方、百五十余人討ち死。御子孫の太田資暁(すけあき)さんのお話では後にその猫を連れて帰り、死後は石像にしてお寺に納めたとか。たぶん道灌公は猫がお好きだったのね。激戦の中、猫に心を留められる余裕が不敗の原動力のひとつだったのかと思えないでもない。猫の像は江戸庶民の信仰の手ですっかり磨り減ってしまい、今は年に一度節分の日だけに公開される。

その自性院の庭に大きな木が1本あり、飴色の実がたくさん散らばっている。お仲間の方によると、ムクロジの実。中の黒い種は羽根つきの羽根の黒い部分。百八つの実をつないで祈ると、厄除け他多くの福徳がある、とこちらはお釈迦様がおっしゃったそう。皮はサポニンを含み、昔は石鹸のかわりに。いくつか拾って持ち帰り、ペットボトルに入れて水を注いで置く。シャボン玉、できました。食器洗い、風呂掃除、使ってみました。サッパリと洗い上がり、なかなかのものです。

なお、帰りがけお寺の門柱の上に大きな猫の像を見ました。大判をしっかと手で押えたとても可愛い像です。たぶん御利益あり。西新宿に移動の後、十二社熊野神社へ。美しい滝のあった風光明媚の場所だったようです。すぐ近くに伝説の少女が山吹を道灌公に差し出す、久遠の像を見ます。若き武将と清楚な乙女、そして山吹の花。幼少より学問に秀でた若者へ和歌、また別の知と文化への導き。少女ではなく老女だったという説もあるとか。老女だったとしたらそれもなかなか。それとも夢をこわす？

バスタ新宿、ロボットにも会って現代の喧騒の中を帰宅の途につきます。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

10月17日(火)10月例会は総会として新役員を選出し、次年度の活動計画案が了承された。折角の機会なので、前回に続き月番高橋さんで、十代目柳家小三治の「子別れ」(上)(中)(下)のDVDを通しで鑑賞した。参加者15人。

11月21日(火)機器の関係で、月番の方のブルーレイが再生できず、田中文彬さんのDVDを鑑賞した。内容は、柳家金語楼の「問わず語り」、四代目柳亭痴楽の「綴り方教室」、二代目三遊亭円歌の「呼出電話」、五代目古今亭今輔の「お婆さん三代記」、四代目三遊亭小円遊の「崇徳院」、五代目鈴々舎馬風の「禁酒番屋」であった。鈴々舎馬風を除いては物故者であり、金語楼のところでは司会に宮田輝が登場し、懐かしく拝見させて貰った。参加者14人。

◆藩史研究会

10月13日(金)館外学習会として現在の埼玉県伊奈町にあった武蔵小室藩の跡を見学した。午前中は伊奈町総合センターで現地ボランティアガイドの飽津英雄さんによる講座「伊奈忠次の生い立ちと功績」、午後は丸山駅に移動し、伊奈氏屋敷・陣屋跡の見学をした。武蔵小室藩は、天正18年(1590)足立郡小室・鴻巣1万3千石(1万石とも)に封じられた伊奈熊蔵忠次により立藩。3代忠勝が幼没したため改易となったが、弟の忠隆に小室郷1190石が与えられ、旗本伊奈家として存続した。忠次の次男忠治は川口赤山に陣屋を構え、以後180年にわたり伊奈家が関東郡代を務めた。参加者12人。

11月3日(金)谷川よしひろさんの担当で長門国清末(きよすえ)藩(山口県下関市)を発表した。毛利萩藩支藩の長府藩3代毛利綱元の弟元知が1万石を分与され、承応2年(1653)に立藩。享保3年(1718)長府藩が断絶したため、2代元平が長府藩主に転出し、藩は廃絶した。その後3代政苗が再興し、明治2年(1869)8代元純が清末藩知事に任命された。参加者13人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

10月12日(木)米屋久右衛門の「日記」を読む。明治4年6月22日～7月21日。参加者8人。

10月27日(金)明治4年7月22日～8月17日。8月10日朝9時ごろ町内の畳屋から出火。すぐ消し止められたが、その日のうちに田中家を訪れた見舞客は29人。また、店の竜吐水で消防にあたった男女奉公人一統、抱鳶・左官・廻り髪結人へ酒代を与えている。参加者9人。

11月9日(木)明治4年8月18日～9月25日。「店中残らず膳箱廃に相成り候事」とあり、田中家ではこのころ、奉公人も含め箱膳をやめて飯台(テーブル)で食事をするようになったらしい。参加者10人。

11月23日(木)明治4年9月26日～12月9日。参加者7人。

◆江戸東京を巡る会

11月19日(日)晩秋の上野の山に在りし日の寛永寺の威容を偲び、併せて文化の集積地としての現在の上野の杜の建築物を訪ねた。厳有院霊廟勅額門から清水観音堂まで上野公園の著名な建築物を一通り巡った。参加者41人。

当会は今回を最終回として活動を終了し、解散となりました。

◆『江戸名所図会』輪読会

10月19日(木)担当は中川博允さん。今回は上練馬谷原邑、現練馬区高野台の長命寺と、上石神井村、現練馬

区石神井台の三宝寺がメインである。長命寺の奥の院は紀州高野山の地勢を模しており、享保年間から東高野山、また新高野として隆盛を極めた。亀頂山三宝寺は応永元年(1394)に鎌倉大楽寺の法印権大僧都幸尊が石神井城の外郭、舌状に伸びた先端部分に創建。文明９年(1477)太田道灌が豊島氏を滅ぼした後、石神井城の跡地に移したという。参加者16人。
11月23日(木)担当は松本美智子さん。石神井三宝寺辺りの三宝寺池、石神井城趾、練馬城趾。埼玉県に入って志木、朝霞、新座辺りの旧跡。三宝寺池には小島があって弁財天の祠が建っていた。池の南東、台地には豊島氏が住んでいた石神井城があった。現在の豊島園遊園地を含む一帯には同じ豊島氏の一族が建てた練馬城があったが、遺構はほとんど残っていない。「いろは樋」は野火止用水から新河岸川を跨ぎ越した水路橋で、これによりこの地区の農業用水の不足が解消された。参加者14人。

◆日本の大道芸伝承会

10月11日(水)9月16日に深川江戸資料館で開催されたイベントは台風情報が出たためこれまでになく人出が少なかった。反省と対応について議論した。玉すだれ、地獄極楽など通常の練習もした。参加者３人。
11月８日(水)深川江戸資料館主催の３月17日(土)にある「江戸の物売りと大道芸」へ出演するための打ち合わせ。玉すだれ、地獄極楽、がまの油売りなどの練習。参加者３人。

◆江戸を語る会

10月28日(土)高田利正さんが「横浜開港と生麦事件」の演題で発表した。外国人の居留地として開港された横浜の地理的環境や開港のいきさつ。文化元年(1804)から明治10年(1877)までの幕末・明治の様々な事件を時の流れの中で理解できる年表による説明があった。文久２年(1862)８月生麦で島津公の行列に英国人が遭遇し、うち４人が殺傷されるという事件。時代背景やその後の時代が急展開していく流れがよく理解できた。参加者８人。

◆かっぽれの会

10月・11月　休会。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

10月26日(木)今回は、豊島一族最後の本拠地で、文明９年(1477)太田道灌の攻撃を受けて落城した石神井城跡を中心にその周辺をめぐった。葛城明彦先生の解説で三宝寺池の周りを歩き、石神井城落城にまつわる塚や城跡を見学、石神井城西南端から太田道灌陣城を遠望した。通常鍵の掛かっている石神井城内郭跡を先生のつてで開けていただき、内部の詳しい説明を受けた。その後、石神井氷川神社、三宝寺、道場寺などをまわり解散した。参加者33人。
11月５日(日)１回目とほぼ同じコースを巡った。参加者18人。
11月30日(木)今回は、豊島一族と太田道灌が妙正寺川中流付近でこの地域の覇権をかけて戦った江古田ヶ原合戦の戦場跡を中心に、葛城明彦先生の解説で巡った。葛が谷御霊神社、この合戦の開戦地とみられる四ツ塚跡を見て妙正寺川を越え、江古田原古戦場碑などを見てから中野区立民俗資料館に寄って見学。この合戦で付近の丘が道灌の本陣と伝えられている沼袋氷川神社から道灌が植えたとされる杉の木(道灌杉)の跡を見学して解散した。参加者40人。
12月３日(日)１回目と同じコースを巡った。参加者30人。

◆文士散歩

11月18日(土)「谷根千」〈森鷗外〉を巡るの２回目。西日暮里、谷中、根津を歩いた。御殿坂から八百屋お七命名の由来となった延命院七面堂、七面坂を通り宗林寺、岡倉天心記念公園、長安寺、大円寺などの仏閣群を経てくねくねと曲がる旧藍染川暗渠のへび道を辿る。気付かなければ通り過ぎてしまいそうな断崖に掘られた真島稲荷、ふれあい館、根津図書館から異人坂、漱石旧居跡そして根津神社では森鷗外碑銘水飲場及び本社殿を巡った。谷中根津界隈、今日は仏閣の多さに気づかされた有意義な１日であった。参加者８人。

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の２サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ａ班『新古改撰誌記』

前回に続き五役の職務などについて記載する。「小人」は頭３名(80俵高)、配下は500名位(15俵１人扶持)で御玄関や中の口などを警衛し、女中や奥役人が出入りする際はこれに供奉し、また、御使や用品の運搬などに従事した。「駕籠之者」は頭３名(60俵高)、配下は150名(20俵２人扶持)で将軍やその家族が乗る駕籠の担ぎ手であった。「掃除之者」は頭３名(100俵高)、配下は190名位(10俵１人半扶持)で、内訳として紅葉山掃除之者組頭(30俵２人扶持)、その配下(13俵１人扶持)、また桜田御用屋敷掃除之者(10俵１人扶持)などがあり、江戸城内の御殿をはじめ、紅葉山や吹上御庭など様々な場所の清掃に従事した。

友の会めも(開催日と人数)

平成29年10月～11月

◆役員会10月10日(火)15人。11月14日(火)15人。◆事業部会10月３日(火)24人。11月７日(火)22人。◆広報部会10月17日(火)８人。11月21日(火)10人。◆総務部会10月24日(火)20人。11月28日(火)11人。◆古文書講座 入門編：10月４日(水)午前74人・午後75人。11月１日(水)午前77人・午後86人。初級編：10月18日(水)午前74人・午後75人。11月22日(水)午前75人・午後63人。中級編：10月21日(土)午前48人・午後28人。11月25日(土)午前46人・午後28人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト 10月５日(木)Ａ班８人。Ｂ班３人。10月26日(木)Ａ班８人。Ｂ班３人。11月２日(木)Ａ班９人。Ｂ班４人。11月16日(木)Ａ班９人。11月23日(木)Ｂ班２人。

『えど友』100号記念投稿

「東京風景いまむかし」

「久我山稲荷神社」の庚申塔

林　正信

「久我山稲荷神社」は、京王井の頭線・久我山駅より徒歩約６分のところにあります。以前、住んでいた場所の近くの神社です。

創立年代は明らかではありませんが、古来より久我山村の鎮守として祀られていたそうです。境内に、元禄16年(1703年)建立の「庚申塔」があり、養蚕の無事を祈願したものとして、伝えられています。

今まで近くに住んでいたものの、まったく気づかずでした。事実であれば長い歴史を感じる史跡です。

▲庚申塔

東急文化会館の思い出

菊池　真一

現在渋谷駅東側の渋谷ヒカリエがある場所には、かつて「東急文化会館」が建っていました。東京急行電鉄が建設した文化施設で、開業は昭和31年(1956)12月1日です。四つの映画館やプラネタリウム、宴会場、美容室、レストランなどが入っていました。開業時のキャッチフレーズは「生活文化と娯楽の殿堂」で、東京の新名所として修学旅行のコースにもなっていたそうです。

我が家が目黒区の東横線沿線にあったため、小学生の頃からよく出かけていました。一番のお気に入りは屋上のドームが目を引く「五島プラネタリウム」で、解説員の言葉に耳を傾けながら、しばし星の世界に浸っていました。中学・高校時代には「星の会」に入り、ちょっと高等な(？)天文学の話を楽しむようになります。

社会人になってからは徐々に映画が好きになり、まだ珍しかったビル内の映画館に通うようになりました。当時は洋画を見ることが多く、渋谷地区最大の映画館であった「パンテオン」や、旧作を低料金で見られる「東急名画座」には足しげく通ったものです。

しかし、職場(信用金庫)が中央区にある期間が長かったため、自然と銀座・有楽町辺りで映画を見るようになり、次第に足が遠のいていきました。また、平成元年に東急本店併設の複合文化施設Bunkamura(東急は文化がお好き!?)が開業すると、渋谷に出かけても専らそちらを利用するようになりました。これと前後して昭和61年に東急名画座がロードショー館となり、平成13年には五島プラネタリウムも閉館となってしまいました。

そして建物の老朽化と渋谷駅の地下化工事のため、平成15年(2003)６月30日付での閉館が発表されました。私のみならず渋谷周辺の住民にとっては大事件。しかし、最後にサプライズが！　「甦れ！東急名画座」と題して閉館直前10日間限定で東急名画座が復活したのです。懐かしの名画の上映やトークショーがあり、連日多数の映画ファンが詰めかけました。館内の壁面は観客の寄せ書きでびっしりと埋まり、東急名画座や東急文化会館への熱い思いがあふれていました。こうして東急文化会館は47年の歴史に幕を下ろしましたが、今でも私の思い出の中に残っています。

▲閉館直前の東急文化会館（2003.6.29 撮影）

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成29年10月8日）

定番・江戸城周辺探訪
ーその２（内濠周辺）ー

秋晴れの汗ばむような一日、江戸城の内濠とその周辺を歩きました。

九段坂から千鳥ヶ淵へ

東京メトロ・都営地下鉄九段下駅出口近くの昭和館前に集合、九段坂から左回りに歩いていきます。北の丸公園の入り口にあるのが田安門で、８代将軍吉宗の第２子宗武がここに徳川御三卿の一つである田安家を創立しました。近くの歩道脇には靖国神社から移築された常灯明台と品川弥二郎像が並んで立っています。

▲千鳥ヶ淵

ここから桜の名所として有名な千鳥ヶ淵沿いの遊歩道に入ります。名の由来は堀の形が千鳥に似ているからとも、たくさんの渡り鳥が集まる場所だからともいわれています。しばらく行くと右手に鍋割坂があり、坂上には村田蔵六(大村益次郎)の屋敷跡があります。その先の阿部駿河守邸跡(白川藩阿部家屋敷跡)辺りは、現在千鳥ヶ淵戦没者墓苑になっています。ここには、第２次世界大戦以降の身元不明戦没者の遺骨が約35万体安置されているそうです。江戸時代には半蔵門までが千鳥ヶ淵でしたが、明治時代に途中で区切られて先は半蔵濠となっています。この辺りの対岸には、芝土居の上部に低い石垣を築いた「鉢巻土居」の様子がはっきりと見てとれます。

▲鉢巻土居

半蔵門から桜田門へ

英国大使館を右に見ながら歩いていくと、門の警備を担当した服部半蔵に由来する半蔵門が見えてきます。天下祭りの行列はここから城内へ入っていました。半蔵門の辺りは内濠で最も高い場所で、その先の桜田濠の眺めは絶景です。右手の最高裁判所の敷地内は三河田原藩三宅家上屋敷跡で、蘭学者・画家として有名な渡辺華山がここで生まれています。やがて三宅坂の下りにさしかかると、皇居を周回しているランナーたちがスピードアップするため、かなり危険を感じました。

▲桜田門

国会議事堂前の憲政記念館の場所には彦根藩井伊家の上屋敷がありました。13代藩主・大老井伊直弼はここから桜田門へ向かう途中で暗殺されています。また、警視庁裏手にある総務省・国土交通省の敷地内には広島藩浅野家の上屋敷がありました。忠臣蔵で有名な赤穂浅野家の本家です。桜田門は正式には外桜田門といい、高麗門(こうらい)と渡櫓(わたりやぐら)門の間が枡形に区切られた「枡形門」になっています。江戸城内で現存する枡形では最大級の規模で、二方が濠となっている変形枡形門です。

皇居前広場から大手門へ

桜田門を入ると、芝生と黒松の緑が玉砂利に映える皇居前広場に出ます。江戸時代には西の丸下と呼ばれていました。皇居正面に架かる橋は、現在では手前の石橋と奥の鉄橋を併せて二重橋と呼ばれていますが、鉄橋が本来の二重橋です。かつては木製の橋で、上下二重構造のため二重橋と呼ばれました。ここから伏見櫓・坂下門・富士見櫓・桔梗門・巽櫓を順に見ながら歩いていくと、江戸城の正門であった大手門の前に出ます。大名が登城する際は門前の下馬所で乗り物を降りていました。門前で待機している従者たちが噂話をしていたのが「下馬評」の語源となっています。

将門塚から蕃書調所跡へ

大手門の先で内堀通りを渡ったところが酒井雅楽頭(うたのかみ)の上屋敷跡で、この一角に史跡「将門塚」があります。元あった平将門の首塚は消滅しており、現在は「将門首塚の碑」と石塔婆が立っています。気象庁付近の内濠川には一ツ橋が架かっており、橋の脇に一ツ橋門の石垣の一部が残されています。ここから見える平川門の左手に、御三卿の一つ、一橋家の屋敷がありました。「不浄門」とも呼ばれた平川門手前の橋には、場内の橋から集められた慶長・寛永期の擬宝珠が見られます。

太田道灌公追慕の碑、元の竹橋があった場所、雉子橋門跡の石垣と見ていくと、その先が清水門です。こちらは一方が濠の変形枡形門で、門内には「雁木(がんぎ)坂」と呼ばれる急な石

▲雁木坂

段が当時のまま残されています。かなり幅広で、駕籠を横向きにして上るためとも、馬で上るためともいわれています。ここがもう一つの御三卿、清水家の屋敷跡です。最後は昭和館前に戻り、東京大学の前身である「蕃書調所跡」前で解散となりました。　　参加者116人。

【取材】文：広報部会・菊池真一
写真：同・佐藤美代子

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

大相撲beyond2020場所　観戦の記

“おすもうさんにあいにいこう!!”のキャッチフレーズのもと、今年も昨年に引き続いて、両国国技館で「大相撲 beyond 2020場所」が開催されました。これは2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック大会に向け、大相撲に多様なお客様を受け入れるためのプロジェクトです。当日はお子さん、高齢者、障がい者、外国人など、多くの方々が観戦機会を持てるよう、さまざまな試みが行われました。江戸博友の会では、このたび日本相撲協会のご厚意により、この特別イベントを観戦させていただきました。

おだやかな秋晴れの10月4日(水)、国技館は12時の開門前から、大勢の人々であふれ返っていました。エントランス前では関取らのお出迎えがあり、人気力士遠藤にはたくさんのファンが取り囲み、競って一緒の写真を撮っていました。

▲満員の観衆

枡(マス)席につくと、すでに本土俵では十両・幕下以下の力士たちによる朝稽古が行われていました。午後1時の開演と同時に「触れ太鼓」が土俵を一周、その独特の軽快な太鼓の響きによって会場が一気に盛り上がりました。一番初めは「子どもの稽古」、両国幼稚園など、都内の幼稚園児たちが5人の力士たちから稽古をつけてもらいます。小さな体にしっかりとまわしを締め、会場の大きな声援を受け、次々果敢に大きな力士に立ち向かいます。

▲子どもの稽古

高々と吊り上げられたり、振り回されたり、転ぶ子、泣き出す子、おすもうさんを土俵に這わせ、ヤッタ、ヤッタ！　と小躍りして喜ぶ子など、場内は笑いと歓声に包まれました。

次は「相撲甚句」、化粧まわしを付けた美声の力士8人が自慢ののどを披露しました。

♪アードスコイ　ドスコイ　ア〜すいすい泳ぐ蛙でも　ホイ　たまには温泉ひと休み　ホイ　箱根か別府か雲仙か　ホイ　それとも道後か金毘羅か　ホイ　蛙はやっぱりゲロゲロ、下呂　アードスコイ　ドスコイ♪

の文句に会場は大笑いでした。続いてはお待ちかね「初切(しょっきり)」、力士2人と行司が土俵上で相撲の禁じ手を面白おかしく演じる見世物。テレビのなかった小学生時代に初めてそれを見た時の驚き、その掛け合いの面白さに笑い転げた遠い昔を思い出しました。

▲初切

さて「幕内土俵入り」です。東西の花道から美しい化粧まわしの幕内力士が入場、ただ本場所と違ったのは、力士たちが可愛い化粧まわしをつけた赤ちゃんを両手にしっかりと抱いての登場でした。ぐずる赤ちゃんには大きな力士も大弱り、最後にみんなで赤ちゃんを高々とさし上げます。「花相撲」ならではの演出です。続いて「横綱土俵入り」、何と白鵬、日馬富士、稀勢の里、鶴竜が次々登場、4横綱揃い踏みの豪華な土俵入りです。観客は大喜び、本場所でもめったに見られません。この

▲幕内土俵入り

▲稀勢の里土俵入り

大相撲の国際交流イベントへの日本相撲協会の並々ならぬ意気込みが感じられました。「国歌斉唱」に引き続き、白鵬、稀勢の里両横綱による相撲の伝統儀式「三段構え」。昨年は日馬富士、鶴竜両横綱が行いました。そして横綱日馬富士による「五人掛かり」(5人を相手に次々倒す)の後、いよいよ「幕内取組」が始まりました。取組ごとに日本語と英語で力士を紹介、また、まわしが緩(ゆる)んでの行司待ったや、物言いがついて審判の結果、同体とみなし取り直しなど、その都度、丁寧な解説があり、本場所と違った独特の雰囲気に包まれました。結びの一番は稀勢の里－日馬富士戦。そして最後は聡ノ富士(さとのふじ)が華麗な「弓取式」を披露、予定を大幅にオーバーして3時30分、打ち出しとなりました。

本場所とはまた一味異なったまことに和やかな雰囲気の相撲観戦でした。国技館を出て両国界隈をそぞろ歩き、締めはやっぱり縄のれん、煮込みと焼き鳥、日本酒でしっかり体を温め、店の外に出たら中秋の名月が天空にくっきりと浮かんでいました。

【取材】文・写真：広報部会・岡本　脩

江戸歌舞伎とともに歴史を刻んだ芝居小屋　中村座

江戸博の常設展示室６階に入ると、すぐ目の前が日本橋です。橋の欄干から左側を眺めると、江戸歌舞伎とともに歴史を刻んできた中村座が見られます。両側に天水桶を置いた棟のど真ん中に、櫓幕に包まれた櫓が建っているのは公許三座（中村座、市村座、森田座）の証です。当初、猿若座と呼ばれた最古の歴史を誇るその中村座を、江戸博学芸員の松井かおるさんに案内していただきました。

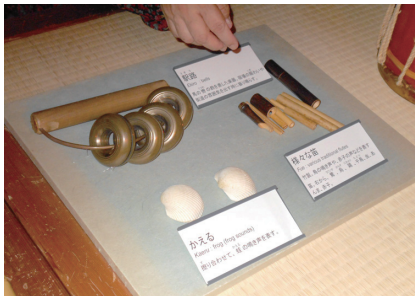
江戸博の常設展示室は５階と６階に分かれていますが、日本橋の上から確認できる「江戸ゾーン」のランドマークとして芝居小屋のファサード(建築物の表面)を、２階分ぶち抜きで展示しています。上からだけでなく下からも見ることができ、なかなか面白いものです。中村座の19世紀初頭の姿を、正面部分だけですが忠実に復元しています。当初の予定では全体を復元するつもりでしたが、消防法の規制により、間口11間(約20メートル)、奥行き３間(約５.５メートル)だけになりました。それでも当時の芝居小屋の雰囲気は十分伝わります。中村座の座紋が書かれた櫓のすぐ下には、両脇に瀬川路考と岩井半四郎、真ん中にはひときわ大きな字で「なかむらかん三良」と書かれた大看板(櫓下看板)が目につきます。その向かって右側には、ずらりと絵看板が並んでいます。団十郎の「暫」は江戸歌舞伎を代表するものとして、特別に描いてもらったそうです。他も、現在歌舞伎座の絵看板を描く職人で、代々絵看板を手がけてきた九代目鳥居清光氏が年に一枚ずつ描いたものの集大成です。左側には、大名題看板、小名題看板、役割看板が順に並んでいます。文化２年(1805)11月の顔見世興行を再現したものです。

５階へ下り、脇から芝居小屋の中へ入りました。すぐ目についたのは、原寸大に拡大された浮世絵パネルです。土間から舞台の方を見渡したさまが、一目でわかるように描かれており、芝居小屋の中の様子を簡単に理解できます。土間から舞台へ向かって一番広い空間は、「平土間」といい、安い席です。平土間の両横、少し高くなっている席は「高土間」です。平土間の方が真正面から舞台を見ることができるからいいと思いますが、江戸時代の人の感覚は分かりません。

桟敷で角隠しを被っている女性は、奥女中など身分が高い女性でほこり避けのためで当時の流行だそうです。いずれにしろ、舞台と客席が一体となって盛り上げていた様子が見て取れます。役者や観客のざわめきが聞こえてくるようで臨場感いっぱいでした。

当時は今ほど照明設備が発達していませんでしたから、芝居が行われるのは、朝から夕方までに決まっていました。それでも不足しがちな小屋の明かりを増すために蝋燭立てや、役者の顔を照らしたりする面明かり(升に蝋燭を立てたもので、スポットライトの役目をした)もありましたが、今とは比べものにならないほど、薄暗い中で行われていました。また火事にはめっぽう弱い上に、非常口もありませんでした。ですから火事になると大変でした。

客席からは見えない黒御簾の中には、擬音(効果音)用の小道具が並んでいました。「がり時計」は時計のゼンマイを巻く音です。団扇に糸で大豆を結びつけてある「雨団扇」は「雨音」です。もっとも江戸博は博物館ですので植物性のものは使えません。ビーズで代用しているとのことでした。他にも蛙の鳴き声用の「赤貝の殻」やしゃんしゃん子馬の「鈴(駅路)」、節季候(年末にやってくる角付け芸人)が使うような「ささら」、能管(能楽で使う笛)や櫓をこぐ音や扉のきしむ音を出す小道具、拍子木や銅鑼、木魚までありました。童心に返っていじってきました。



当時は履物を脱いで上がることになっていましたから下足番は欠かせません。履いてきた履物を預けて、代わりに下足札を受け取る場所は、向かって左側の鼠木戸口(出入口)脇の「仕切場」がそうです。

なお、芝居小屋の中は、展示ガイドボランティアに申し込めば案内してもらえるそうです。ただ、土日は大道芸や落語などの催し物をしていることがありますので、そのときは避けてくださいとのことでした。

【取材】文・写真：広報部会・光田憲雄

江戸

名所図会を歩く…㉟

［新日暮里から鬼子母神］

鳩森八幡神社の富士塚

今回は千駄ヶ谷から代々木、代田橋、高井戸と広い地域を回るため、電車移動を多用しています。歩いたのは、本格的な秋の訪れを感じる９月下旬から10月上旬でした。

新日暮里から千駄ヶ谷八幡宮

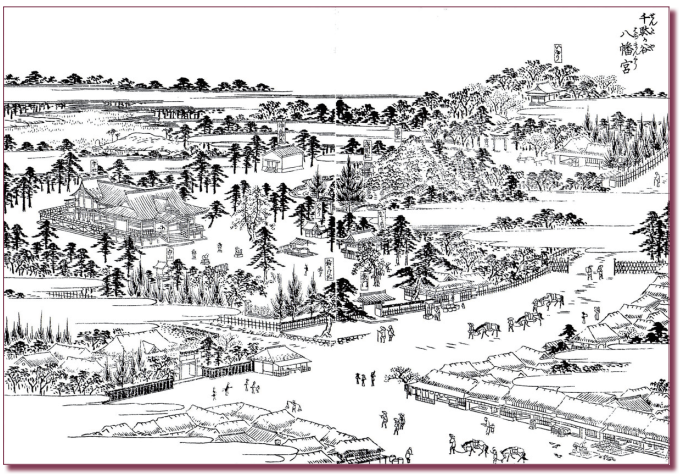
都営地下鉄大江戸線の国立競技場駅で下車してＡ３出口から地上に出ると、目の前には新国立競技場建設工事のクレーンが何本も立ち並んでいます。外苑西通りを南へ進み、明治公園の先を右折するとすぐ法雲山仙寿院があります。かつては壮大な堂宇と庭園により江戸名所の一つに数えられ、谷中の日暮里（ひぐらしのさと）に対して新日暮里と呼ばれていました。しかし、明治以降２度の全山焼失、東京オリンピックの道路工事などにより景観は一変しました。現在の本堂は昭和40年(1965)に再建されたものですが、高屋根の堂々とした造りは昔日の面影をわずかに偲ばせています。

本堂の脇道を道なりに進むと榎坂に突き当たります。かつて坂の途中に「お万榎」と呼ばれる榎の巨木があったことからつけられた名ですが、戦災で焼失しています。瑞円寺の塀に沿って上った先には観音坂があり、こちらは坂下にある千駄ヶ谷観音堂(観谷山聖輪（しょうりん）寺)の本尊であった如意輪観音が由来ですが、残念ながらこちらも戦災で焼失しています。寺務所の方に伺うと、小型の写しが別の場所に保管されていたため、現在は写しを本尊として祀っているとのことでした。

観音坂を上った先に千駄ヶ谷八幡宮(現鳩森（はとのもり）八幡神社)があります。社殿の右手にある富士塚は寛政元年(1789)築造といわれ、都内に現存するものでは最古です。さほど高さはありませんが登山道は険しく、里宮・奥宮・金明水・銀明水・釈迦の割れ石など様々な景色が楽しめます。また境内の奥まったところには将棋堂があり、昭和61年に日本将棋連盟から奉納された高さ1.2mの大駒が納められています。神社の南向かいに将棋会館があるため、こちらを訪れる将棋ファンの方も多いようです。裏の鳥居から東京体育館脇の道を進むと、正面がＪＲ千駄ヶ谷駅です。

代々木野八幡宮から代太橋

新宿駅から小田急線に乗り換えて代々木八幡駅で下車。駅前の階段から山手通りに上がって北に進むと、代々木村の鎮守であった代々木野八幡宮(代々木八幡宮)があります。境内には樹木が繁茂し、まさに鎮守の森のイメージ通りです。最初に訪れた日は例大祭に当たり、多くの人で賑わっていました。当地からは石器時代・縄文時代の遺構が発掘されたため、参道の途中には「代々木八幡遺跡」として竪穴式住居が復元されています。社殿の荘厳な雰囲気との対比がちょっと面白く感じられました。



▲長谷川雪旦：千駄ヶ谷八幡宮

再び新宿駅に戻り、今度は京王線で代田橋（だいた）駅下車。代田という地名の由来はダイダラボッチという巨人伝説によるもので、この付近の玉川用水に代太橋(代田橋)が架けられていました。駅の南口から左へ進むと「ゆずり橋」があり、昭和61年に流れを復活させた玉川上水が橋の左手へ続いています。橋の手前から階段を下って水路脇の細い道を歩いていくと、やがてうっそうと木の茂る景色となり、水路は甲州街道の手前で暗渠となっています。この少し先に代太橋があったようです。ゆずり橋の反対側は緑道になっていて、玉川上水の流路をたどることができます。

高井戸から鬼子母神

さらに京王線で上北沢駅下車。北口から甲州街道に出て右手へ進んでいくと、道路沿いに「甲州道中一里塚跡」の説明板が立てられています。前方の高速道路下に日本橋から数えて４里目を示す一里塚があり、この辺りに下高井戸宿がありました。慶長７年(1602)に設けられた高井戸宿が同９年に上・下高井戸宿に分けられたもので、内藤新宿ができるまでは甲州道中(甲州街道)最初の宿場として賑わっていました。通りを渡って進むと左手に宗源寺があり、この隣に本陣が置かれていたそうです。また、この寺に移された不動堂が元は高台にあったため「高井堂」と呼ばれており、これが高井戸の地名の由来になったともいわれています。

さらに先へ進むと日蓮聖人作の鬼子母神を安置する清月山覚蔵寺があります。門前の石塔には「高祖(日蓮)御作開運鬼子母尊神安置」とあり、どっしりとした山門に続く参道には玉砂利が敷き詰められていて風格を感じさせます。鬼子母神像を拝むことはできませんが、境内には天明元年(1781)寄進の「日蓮聖人五百遠忌塔」が残されています。この近くから通りを渡り、桜上水駅へ向かいました。

今回で巻之三・天璣（てんき）之部のうち東京23区部分を歩き終えましたので、次回より巻之四・天権（てんけん）之部に入ります。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

えど東京一景

(8) ―東京大神宮―

JR飯田橋駅西口から約５分歩いて下り坂になる手前が東京大神宮です。「日本人の心のふるさと伊勢神宮にお参りしましょう」の幟がはためいていました。境内にはトウネズミモチ(モクセイ科)、ヒマラヤシーダー(マツ科)などの大木が見られ、せせらぎも聞こえて清浄な雰囲気を醸し出し大都会の一角のオアシスのようでした。秋の午後に訪れましたが参拝者は若い女性が多く、本殿前に３台の賽銭箱が横並びにあるにもかかわらず不思議なことに真ん中の１台に行列を作って順番を待っていました。また「華みくじ」「恋文みくじ」「恋みくじ」「血液型みくじ」など置かれ、厳粛なというより華やかな感じを受けました。主祭神は天照皇大神(あまてらすすめおおかみ)、豊受大神(とようけのおおかみ)で、明治13年(1880)、東京における伊勢神宮の遥拝殿として初めは日比谷に創建されて日比谷大神宮、関東大震災後の昭和３年(1928)にはこの地に移り飯田橋大神宮と呼ばれました。戦後は東京大神宮に改められ、「東京のお伊勢さま」と称されます。「造化の三神」が併せ祀られていることから今では縁結びの神としても知られ、良縁を願う人々のお参りも年々多くなっているそうです。若い参拝者が多かったのに納得です。

そして日本で初めて神前結婚式が行われたお宮で、結婚会館も隣接していました。鎮魂の社というより人生の節目節目の祈りの場として親しまれているようです。また、東京五社及び東京新五社の一つで、後者は旧江戸城を中心に時計回りにこの大神宮から始めて、最後にまたここに戻って円(縁)を結んで巡拝するとのことです。

【取材】イラスト：広報部会・福島信一
文：同・内匠屋京子

江戸博クリップ

「江戸博の魅力」

江戸東京博物館管理課管理係　勝見章功（かつみ あきのり）

友の会の皆様、平成29年５月から江戸博にお世話になっています。昭和49年に建築職として入都して以来、庁舎、病院、高校・特別支援学校など都立施設の建設に長らく携わってきました。

建設する側の立場でしか江戸博を見る機会がなく、江戸博の一員となって６カ月、改めて運営の苦労、博物館ならではの魅力、文化の活力・醍醐味があることが分かり始めてきたところです。半年休館の前日、常設展示をじっくり見る機会があり、昭和からさかのぼって見ていたところ、故郷の新潟県三条市は五十嵐川と信濃川の合流する舟運で発展した町で、実家は川沿いの立地から和船が一艘、長い敷地割の廊下に吊ってあり洗い場を兼ねた船着き場があって、乗ってみたいと懇願したところ(孫パワー?!)、明治生まれの曾祖父・曾祖母が櫓漕ぎの体験として大正生まれの亡き父や叔父を動員し、兄弟・姉妹で乗ったことや、新しもの好きの曾祖父が二眼レフで写真を撮っていたこと、一ノ木戸、古城町、鍛冶町など、城下町であったことがわかる地名が残っていることを思い出し、博物館ってこういう気持ちになれる場所なんだと感動しました。

バブル期の「大きいことはいいことだ」の象徴のような建物ですが、学芸員・友の会の方々の力で、今日まで大切に運営されていることに感謝の念でいっぱいです。オリンピック・パラリンピック後に予定されている大規模改修で、より愛される建物になるよう奮闘努力していきますので、よろしくお願いします。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

催事案内

古文書講座

第３期の日程

古文書講座の今年度第３期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん（学習院大学非常勤講師）
- 開催日：１／10（水）、２／７（水）、３／７（水）

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん（学習院大学大学院史学専攻）
- 開催日：１／17（水）、２／21（水）、３／14（水）

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん（豊島区教育委員会文化財保護専門員）
- 開催日：１／20（土）、２／24（土）、３／24（土）

- 時間：各講座とも、午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも飯田橋・新陽ビル４階の
  「リロの会議室　会議室Ａ」
- 参加費：各講座とも全３回2,400円（初回一括払い）
  釣銭のないようにお支払いください。

【企画担当責任者】宮　俊（事業部会）

地域文化探訪・学習会

第13回（平成29年度 第２回）

墨田区立「すみだ郷土文化資料館」を訪ねる

◆墨田区立「すみだ郷土文化資料館」は平成10年４月12日に開館しました。当館は墨田区の歴史・民俗資料の収集と保存に努め、地域文化の一層の発展を期して開館しました。資料館は三つの階に分かれ、それぞれ異なったコンセプトでまとめられています。江戸博と同じ区内にあり、周辺には歴史的見学場所も多数あります。魅力たっぷりな地域です。

- 開催日：２月22日（木）13時30分～14時　受付
- 開催場所：すみだ郷土文化資料館
  （墨田区向島２－３－５）
- 学習：14時～15時30分
  館の沿革・特徴などについての講演や主な展示品の解説を聞きながら特集展示「名所展」や常設展を見学して、そのあとは自由に見学、そして流れ解散です。
- 交通アクセス：都営浅草線「本所吾妻橋」駅下車、徒歩８分。東武伊勢崎線「とうきょうスカイツリー」駅下車、徒歩７分。その他、詳細なご案内地図は受講票と一緒にお送りします。
- 申込締切：２月５日（月）必着
- 定員：40人**（会員のみ）　定員を超えた場合は抽選**となり、ご希望に添えないこともあります。
- 参加費：500円（当日払い）

【企画担当責任者】清水昌紘（事業部会）

刀剣博物館がオープン

刀剣博物館が江戸博の近くにある旧安田庭園の隣に移転して１月19日（金）にオープンします。
開館時間：９時30分～17時
住　　所：東京都墨田区横網１－12－９
電　　話：03-6284-1000

催事のお申込方法

◆**普通はがき（62円）**に、
①催事名（略名可）・開催日
②会員番号**（必須）**
③氏名（同伴者連記）
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日（10時～12時、13時～17時）**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第101号
平成30年１月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：早川良躬（会長）　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910